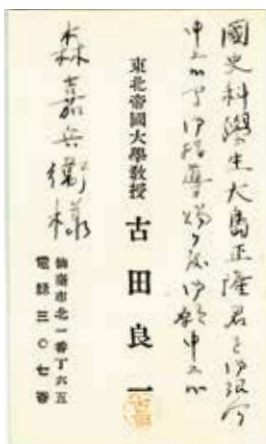
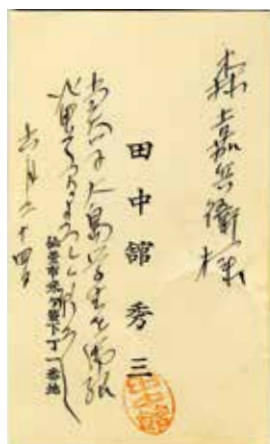


東北大学史料館だより No.14

著者	東北大学学術資源研究公開センター史料館
雑誌名	東北大学史料館だより
巻	14
ページ	1-8
発行年	2011-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133050

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

- 2 「東北中世史の旅立ち」を告げる資料群
—「大島正隆文書」に寄せて—
東北大学大学院文学研究科教授
柳原敏昭
- 5 企画展 開催報告
「せんだい学生スポーツの黎明」
- 6 資料の公開について
- 7 史料館のうごき
- 8 お知らせ

- 上 森嘉兵衛あて大島正隆書簡
(昭和13年7月3日付)
- 下右 同封されていた名刺①
古田良一(国史教授、大島の指導教官)
- 同左 同封されていた名刺②
田中館秀三(法文学部地理学講師)

「どうぞ若輩の唐突無遠慮なるをお咎め下さらず」 —出会いを求める手紙—

ここに紹介するのは昭和13年(1938)7月、当時東北帝国大学3年生だった大島正隆が、森嘉兵衛(もり かへえ 1903~81)に初めて送った手紙です。森は盛岡出身で、日本近世史や農業経済を専門とし、実地に足を運んで庶民の暮らしや文化、地方経済の実態などを徹底的に調査する学風で知られていました。3年前に出版した『旧南部藩に於ける百姓一揆の研究』が高い評価を得て、精力的に研究を進めていた頃でした。

大島は手紙の中で、卒業論文は地主の農民支配の問題を扱いたいので、是非一度会って指導を仰ぎたいと述べています。「鈍なる者ではありますが、御指示下さる事に対しては精一杯の努力と真実とを尽くしたく存じて居ります」といった記述や、大学で指導をうけていた教官たちの紹介状代わりの名刺は、戦前の学問世界の雰囲気と、若い学徒の緊張感を漂わせています。

この手紙を含む大島書簡等が、つい最近森氏ご遺族から史料館に寄贈された結果、当館所蔵「大島正隆文書」の総点数もその分増加することになりました(詳しくは本文)。

「東北中世史の旅立ち」を告げる資料群 —「大島正隆文書」に寄せて—

東北大学大学院文学研究科教授

柳 原 敏 昭



■大島正隆とは

東北大学史料館に、「大島正隆文書」と名づけられた資料群がある。標準的な整理箱ひとつに収まっているから、それほど大量というわけではない。しかしその中には、私たち東北地方で歴史を研究を行っているものにとって、かけがえのない宝物がつまっているのである。

まず、大島正隆について記しておこう。

1909年、父正満・母今子の間に、台北で生まれる。正満は生物学者。祖父の正健は札幌農学校の第一期生で、クラークの薫陶を受けた学究にして敬虔なクリスチャンであった。正隆は、京都一中、麻布中学を経て、1928年に旧制二高に進学する。二高では、山岳部の部長として「二高の山男」という異名をとった。一方、昭和恐慌下の社会矛盾を鋭く感受し、共産青年同盟のキャップとして学生運動を指導した。それは当時においては非合法活動であり、1933年1月、検挙・起訴され、退学処分となる。「アカ」の烙印を押されたのである。

大島は1年余の監獄生活ののち、「転向」を認められ釈放された。この間に、キリスト者として生きる決心をしたという。その後、1936年4月、東北帝国大学に入学を許され、法文学部国史研究室（現文学研究科日本史研究室）に属して中世史を専攻した。1939年3月に卒業すると、副手（嘱託）として研究室に残り、寄託されたばかりの秋田家文書（現在は秋田家史料と呼ぶ。東北大学附属図書館所蔵）の整理にあたりながら、すぐれた論文を次々と発表した。民俗学にも関心を示し、柳田国男に従って、各地で調査を行ったことでも知られている。

才能に恵まれ、東北中世史研究の開拓者となった大島であったが、その生涯は短く、1944年1月、病気のため他界した。享年34であった。特高による拷問と長期にわたる監獄生活が健康を蝕んだのではないかとされている。

活動期間が戦時中ということもあり、大島はしばらく忘れ去られた存在となっていた。しかし、死後20年を経たところから再評価が始まり、1987年には遺稿集『東北中世史の旅立ち』（そして。以下『旅立ち』）がまとめられた。

戦国・織豊期研究の牽引車である藤木久志氏（立教大学名誉教授）は、ごく最近の文章で、大島論文との邂逅がなければ「私の大名研究は不可能だった」と述懐されている（「初学のころ」、『追慕三十年 豊田武先生を偲ぶ』）。このこと一つをとっても、大島の研究の重要性が知られる。学界のスーパースターともいえる網野善彦・石井進両氏が、『旅立ち』の書評・紹介を執筆されていることも付言しておこう。

■目録作成

大島正隆は、東北地方の歴史研究の水準を一挙に引き上げ、戦後の発展の礎を築いた先覚者であった。時代の一步も二歩も先に行っていたといってよい。そのみならず、非合法活動への参画、「転向」、キリスト教への帰依、そして夭折という劇的な生涯自体にも人を惹きつける何かがある。こうした大島が遺した東北帝大時代の自筆メモ・ノートを中心とする遺品と関連資料の全体が「大島正隆文書」（以下「文書」と略す）である。

1988年に伊東信雄氏のご遺族から寄贈された大島の遺稿・遺品が、「文書」の中心となる。伊東信雄氏（1908～87）は、二高教授、東北大学文学部教授をつとめた考古学の大先達である。大島より一つ年長で、高校・大学の先輩にあたる。そのような間柄であったため、大島の遺品が託されたのであった。上記『旅立ち』をまとめる中心となったのも伊東氏である。「文書」のもう一つの柱は、大島の弟・智夫氏から1989年

に寄贈された、朝鮮・満洲旅行関係の資料、信仰にかかわるノート類である。智夫氏は、『旅立ち』に「茨の冠―大島正隆の生涯―」と題する感動的な文章を書かれている。

私が、「文書」の存在を知ったのは2008年夏のことだった。上記のように「文書」の主要部分は1988年に寄贈を受けており、その直後に展示会も開かれているから、不明を恥じるほかない。しかも、成城大学民俗学研究所に大島執筆の「採集手帖」の閲覧申請をしようとして、「お宅の大学にも写がありますよ」といわれて初めて存在を知ったのだから始末が悪い。ともかくすぐに史料館におもむいて「文書」を一覧し、その重要性に気がついたのであった。同時に、分類して封筒に収められるなど整理は行われていたが、目録が作成されていないこともわかった。

そこで目録の作成を思い立ったわけである。佐竹輝昭（文学研究科院生）・佐藤健治（百年史編纂室）・曾根原理（史料館）・七海雅人（東北学院大学）の各氏に声をかけると、すぐに賛同を得ることができた。2005年に刊行された『青森県史』資料編・中世2で、大島ゆかりの秋田家史料関連部分を担当した面々である。東北地方における民俗学の展開に関心をもつ山田仁史氏（文学研究科・宗教学）も協力を申し出てくださった。こうして目録取りが開始されることになったのである。

作業は、資料一点一点のデータをパソコンを打ち込んでいく、あるいは退屈なものである。しかし、多くの発見があり、飽きることがなかった。特に大島が10cm×15cmほどの私製メモ帳を作って、細かい字で克明に古文書や史料を筆写しているのは驚きだった。コピー機などというものがなかった戦前の研究スタイルの一つなのだろうが、大島の個性に帰すべき部分も大きいだろう。そこに写された史料の中には、未紹介で既に失われたものが含まれている可能性がある。つまり新出史料が埋もれているのと同じことである。民俗調査記録も同様であろう。自身の研究のためのノートや草稿もあって、大島という傑出した研究者の学問形成をたどることもできる。受講ノートは、大学史の史料ともなる。既製の黒表紙手帳に一定期間の動向を記したものもあった。彼がいつ、どこに調査におもむき、誰と会ったのかがこれでかなり復元できる。おもしろいのは食べ物に関する記述が多いことで、調査先で出された食事の献立とその評価が毎食のように記されている。

目録は2010年3月に一応の完成を見、史料館のホームページで公開された。総点数はこの時点で328点。目録の作成者としては、多くの方々に「文書」をご覧いただけるという期待とともに、これが機縁となって大島関連の資料が新たに発見されるのではないかとという秘かな希望もあった。その機会は、意外に早く訪れることとなる。

■家族あて書簡

2010年7月、大島智夫氏が史料館にいらっしゃられ、大島が1933年12月に獄中から母親に差し出した書簡4通を寄贈していかれた。この折、智夫氏は、他にも書簡があるので、寄贈したい旨を告げられた。

8月9日、史料館の曾根原理氏と私は、右書簡のご寄贈を受けるため神奈川県海老名市の大島智夫氏宅を訪ねた。最寄りの小田急小田原線厚木駅で降り、地図を頼りに歩いていくと、もうこの辺りかというところで、「大島記念公園」という表示が目に入った。予想外のことだったので曾根原氏と顔を見合わせながら、なおも進んでいくと、住宅街の一角にそれなりの広さの公園がある。中央に石碑があって、公園の由来が記されていた。「大島氏初代正時は里見氏の出で、永享乱後、海老名氏の要請を受けこの地に居を構え…。」どうも一帯は中世以来の大島家の領地であり、正隆もその末裔にあたるらしい。そうこうしていると、一人の老紳士が自転車に乗ってこちらに向かってこられた。智夫氏であった。そのままお宅にご案内いただいた。

智夫氏は、正隆を長兄とする10人兄弟の第九子で、信州大学および横浜市立大学の医学部教授を歴任された方である。御歳85でいらっしゃったが、頭脳明晰・言語明瞭で、こちらが用意した質問に的確に応じられ、われわれの前に次々と資料を出してくださった。言葉の端ばしからは、お兄様への敬愛の念が強く感じられた。

興味をひかれたことは多々あったが、そのひとつにご母堂のことがある。ご母堂は、東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）の出身であったという。大島には父方からの学者の血とともに、母方から芸術家の血も入っていたのである。大島の手帳に、新交響楽団（現NHK交響楽団）の演奏会に足を運んだことが書いてあったのを思い出した。また、ご母堂は音楽教師として宮城女学校（現宮城学院）につとめていたことがあったという。もちろん正隆が生まれる前の話であり、そのころから仙台との縁があったのである。正隆の仙台での最初の下宿は、ご母堂のそれと同じであったともいう。ところで、お話をうかがっている最中、私には気にかかることがあった。通された応接間にピアノがあり（これ自体珍しくはないが）、書架に声楽の

楽譜が多数置かれていたことである。事情をおたずねすると、智夫氏のご息女・富士子氏が、ウィーンでの33年間の音楽活動を終え、帰国されたばかりであるという。芸術家の血は今なお脈々と受け継がれていたのである（この後、富士子氏からリート・リサイタルのチラシと、ご著書『正しい楽譜の読み方』（現代ギター社）をご恵与いただいた。なお、正隆弟の正泰氏は、ピアニストで桐朋学園大学名誉教授でいらっしゃる）。

話を元にもどそう。たっぷり3時間お話をうかがい、いよいよ大島の書簡をご寄贈いただける段になった。全部で30通。大島が、大学に入学した1936年4月から亡くなる直前の43年11月まで、家族に書き送った手紙である。大島の研究者以外の面、いわば人間・大島正隆に迫ることのできる貴重な素材であることはいまでもない。曾根原氏が大切に梱包して、仙台に持ち帰った。智夫氏からは、大島没後40年を記念して開かれた座談会の模様を録音したカセットテープをお借りすることもできた。

■森嘉兵衛あて書簡

前出の黒表紙手帳には、大島が盛岡の森嘉兵衛の許を訪問した記事が散見される。森嘉兵衛（1903～81）は、戦前に岩手師範学校教諭、戦後には岩手大学の教授をつとめた奥羽近世社会経済史の泰斗である。

2010年7月、仙台で開かれた東北中世史研究会に、森ノブ氏が出席された。森氏は森嘉兵衛の高弟で、義理のご息女でもあられる。私は「お宅に大島正隆の書簡はのこっていませんか」とおたずねしてみた。捜していただけるとのご回答を得て1月余り、大島書簡が見つかった旨の連絡があり、8月下旬と9月初めの二回に分けて写を送付いただいた。総計28通（大島差出は26通）。早速、史料館に付託したことはいうまでもない。

最初の書簡の日付は1938年7月3日である。大島が卒論の構想を述べ、岩手県での調査に対してアドバイスを求めた内容であった。これを皮切りに大島が1943年に転地療養を余儀なくされるまで、間断なく両者の間に学問的交流があったことがわかった。それも大島が論文草稿を送って意見を求めたり、森から史料を貸与されたりと、非常に濃密なものであったことも判明した。従来、大島と森との関係に注意が払われたことはなかったが、大島にとって森は最も信頼を寄せる存在だったのである。戦前期の東北地方における研究者間の交流や、大島の学問形成を考える上で、重要な事実といえよう。

このようにして2010年3月末に公開した「文書」目録は、半年を経ずして改訂の必要を生じた。さらに話は続く。年があらたまった2011年1月2日、森ノブ氏からメールが届いた。ご夫君であり、森嘉兵衛資料の管理者でもある肇氏が、上記書簡原本を史料館に寄贈してくださるというものであった。早速、史料館に連絡を入れ、手続きをとってもらったこととした。

森ノブ氏は、1月8日に開かれた東北中世史研究会に書簡原本をご持参くださり、関連する報告もしてくださった。数通がその場に並べられ、参会者は大先輩の肉筆書簡に接することができたのであった。

■おわりに

「大島正隆文書」は、まさに「東北中世史の旅立ち」を告げる資料群といってよく、宝物というに値する。ぜひ東北史や民俗学に関心のある方にご覧いただきたい。学史的に重要な事実が発掘され、また、現代の研究にとっても有用な情報が見いだされるにちがいない。目録作成にあたった6人（大島正隆文書研究会）も検討をつづけていく所存である。

拙文を閉じるにあたって、「文書」所収資料をご寄贈くださった方々、ことに大島智夫氏、森肇氏・森ノブ氏には衷心より御礼申し上げたい。また、ご厚意を受け止めることができたのは、史料館という施設があり、スタッフがそろっていたからこそである。そのことにも感謝したい。

〔追記〕

- (1) 大島智夫氏からご寄贈いただいた書簡は、佐藤健治氏によって『史料館紀要』6号（2011年3月）で紹介されることになっている。また、森肇氏からご寄贈いただいた書簡も大島正隆文書研究会メンバーが全文紹介する予定である。
- (2) 脱稿後、大島智夫氏より、ご自宅の書庫より発見されたということで、さらに大島正隆書簡その他資料約90点をご恵贈いただくことになった。感謝の言葉もない。しかし改稿の暇がないので、報告のみとさせていただきます。（1月末日、校正に際して）

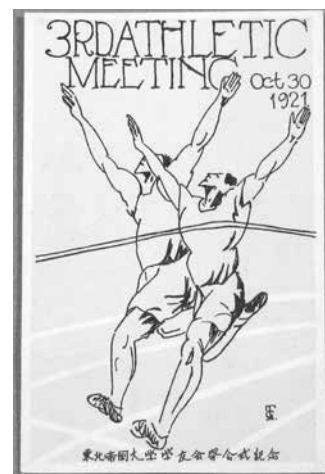
企画展 せんだい学生スポーツの黎明

会期 2010年9月17日（金）～11月19日（金） 東北大学史料館展示室

野球、サッカー、バスケ…近年、仙台でもさまざまなプロスポーツを楽しむことが出来るようになりましたが、こうした仙台におけるスポーツの「源流」となったのは、まぎれもなく、学生たちのスポーツです。明治から戦前・戦後期にかけて、「スポーツ」は学生たちに特有の「文化」として受容され、発展してきました。仙台という地方都市の学生たちが、このスポーツをどのようにとらえ、これをどのように育てていったのか。旧制高校や帝国大学のスポーツ活動を通時的にとりあげることで、仙台における学生スポーツの埋もれた歴史を掘り起こすことをめざし、この企画展を実施しました。

展示は、時間軸とテーマを絡み合わせ、(1)仙台学生スポーツの誕生、(2)仙台学生スポーツの展開、(3)学生スポーツと戦争、(4)戦後復興と学生スポーツ、以上の四つのテーマで構成しました。特に中心となったのが(1)および(2)の部分で、(1)では旧制二高の資料をもとに、ベースボールやテニス、ボートなどの「舶来スポーツ」や、これに刺激を受け発展した柔道などの近代武道の発展について紹介し、また、各学校の「対校戦」の盛行に伴い作られていった数多くの「応援歌」を、パソコン上に表示される歌詞にあわせて「音声として展示」しました。また(2)では、帝国大学が主催する「高専大会」が盛んに行われ、同時にサッカー、バスケ、ラグビー等々学生スポーツの多様化が進んだ、大正から昭和にかけての学生たちのスポーツの状況を、学生思想問題など当時の政治・社会状況と絡めながら紹介しました。

なお今年度も土曜・日曜および祝日開館を実施し、期間中の来館者は1178名を数えました。



東北帝国大学陸上運動会記念
絵はがき（1921年10月）

公開講座「せんだい学生スポーツの源流」

企画展期間中の10月30日（土）、片平さくらホールにおいて、公開講座「せんだい学生スポーツの源流」を開催し、高野眞伍氏（元仙台商業高等学校野球部監督、『野球事始仙台物語』著者）および谷澤直人氏（本学漕艇部OB、『朝風にオールをとりて一黎明期の旧制第二高等学校尚志会端艇部』編者）の二人の講師にご講義いただきました。両氏ともに、興味深いエピソードをふんだんに盛り込んだかたちで講義を進められ、その中に、当時の学生たちの野球やボートに対する思いや、旧制高校の学生文化のなかにおけるその位置づけなどをわかりやすく解説していただきました。



高野眞伍先生

谷澤 直人先生

（永田 英明）

資料の公開について

●法人文書

2004～2009年度移管文書（本部事務機構移管） 252冊

2003年度末以降に保存期間を満了した本部事務機構の法人文書のうち、歴史資料としての評価選別の結果当館に移管された文書。独立行政法人化に伴う検討資料など、近年の大学改革に関するものを含む。閲覧に際しては事前申請が必要。

旧教養部文書 54冊

2008年度に国際文化研究科等事務部より移管された、旧教養部の事務文書。教養部発足直後の昭和25年から昭和50年に至るまでの時期のもので、教養部運営委員会、教授会議事録などの会議資料や大学紛争、川内地区への移転など、教養部の歴史に係る重要資料を含む。（右：川内地区移転時の当初計画図）

旧学生部文書（第二次公開） 70冊（予定）

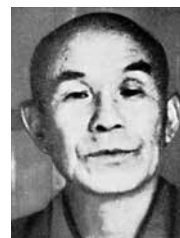
昨年度に公開した戦前分続く公開。学校農園など大学・学生生活の戦後復興にかかるものや、学生団体・大学祭など、昭和20～30年代の学生生活に関わる資料が豊富に含まれる。個人に関する情報を含む文書については事前申込が必要。（右は昭和30年代の大学祭関係書類より）



●個人・団体文書

千葉胤成文書 1004点

千葉胤成（ちば たねなり 1884～1972）は、宮城県出身の心理学者です。大正11年（1922）に東北帝国大学に法文学部が創設されると当初から教授を勤め、固有意識学説の提唱、“Tohoku Psychologica Folia”の創刊、Wunt 文庫を購入するなど、文科系の研究・教育に大きな足跡を残したと称されます。千葉文書の内容は、心理学者としての業績に関わる原稿・メモ類が中心で、広い関心を反映して日本伝統芸術やインド哲学への興味を示す資料も見られます。昭和47年（1972）10月に、黒田正典教授（教養部心理学）の仲介により、ご遺族から寄贈されました。（右の写真は『無意識の心理学』より）



村岡典嗣文書 357点

村岡典嗣（むらおか つねつぐ 1884～1946）は、東京都出身の思想史研究者です。早稲田大学卒業後、外字新聞社などに勤務しながら、明治44年（1911）に『本居宣長』を出版し頭角をあらわしました。大正13年（1924）に東北帝国大学法文学部の教授となり、日本思想史学を確立しました。また、附属図書館第3代館長を務め、教員や卒業生と積極的に交流し、文科系の発展に尽力しました。村岡文書の内容は、講義ノートや身辺資料などで、文献史学を基礎としつつ様々な学問を参照しつつ新たな学問を確立していった様子が窺えます。平成20年（2008）に、ご遺族から寄贈されました。



本川弘一関係資料 51点

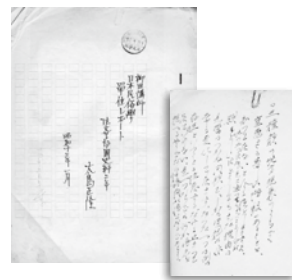
本川弘一（もとかわ こういち 1903～1971）は石川県出身の医学者で、専門は生理学です。昭和15年（1940）から生理学第二講座教授となり、朝日文化賞や学士院賞を受賞しています。昭和36年（1961）4月に医学部長、同40年4月に新設の歯学部の初代学部長、同年11月には東北大学学長を歴任しましたが、全国的に激化する学生運動の時代、混乱に対処し、学長在任中に病没しました。本川文書には、学長時代の講演原稿や、没後に開かれた遺作展で展示された色紙などが含まれています。昭和47年（1972）と平成14年（2002）の二回にわたり関係者から寄贈されました。



史料館のうごき (2010. 9 ～2011. 3)

○新収・新公開資料速報展示 (2010/12/7 ～2011/3/4)

企画展終了後の11月26日より、第10回新公開資料速報展「大島正隆文書 東北中世史研究の先駆者－地域史研究にかけた34年の生涯」を開催しました。今回整理を終えた300点余の中から、二高在学期に獄中から母にあてられた手紙1通、東北帝国大学在学期に柳田国男に提出された連続講義単位取得のためのレポート（右写真）、副手時代に作成された調査メモや手帳などを展示しました。



○全学教育科目「歴史のなかの東北大学」開講！

今年度も、史料館、高等教育開発推進センター、文学研究科等の教員の連携により、全学教育科目（カレントトピックス科目群）の一環として「歴史のなかの東北大学」を開講しました。今年は第2 Semester で開講し、キャンパス見学会、学都仙台の誕生、創立期東北大学の理念、戦前の学生生活や女子学生・留学生の実像、戦争と東北大学、戦後大学改革、川内・青葉山キャンパスの誕生など、大学の歴史を様々な角度から考える授業を行い、最終回には昨年同様野家啓一理事による特別講義がおこなわれました。受講生の中には現役高校生の姿もありました。

○「星寮のおひなさま展」の開催 (2010/2/7 ～3/4)

2006年より行っております、看護婦寮「星寮」や大学病院で昭和初期以来多くの人々の目と心を慰めてきた、「星寮のおひな様」展を、今年も2階展示室において開催しました。



「公文書管理法」施行に向けて

平成23年4月より、「公文書等の管理に関する法律」が施行されます。同法は、国及び独立行政法人等（国立大学含む）における現用の公文書（行政文書・法人文書）の適切な管理を義務づけると共に、歴史資料としての価値を有する公文書（歴史公文書）についても、国立公文書館や省庁・各法人の設置する公文書館的施設に移管して適切な管理・公開をおこなうことを定めています。

本学ではすでに2001年度から、保存期間を満了した歴史的公文書を史料館に移管して公開する制度をいち早くスタートさせていますが、公文書管理法の施行に伴い、史料館に「公文書室」を設置し、歴史公文書の移管や公開利用に関わる制度について、さらなる整備をおこなう予定です。詳細につきましては、あらためてお知らせいたします。

また、これにあわせて、より多くの方に、より便利な形で資料を閲覧していただくため、史料館1階に新しい閲覧室を整備する予定ですので、どうぞご利用下さい。

新しい展示室(魯迅展)・閲覧室がオープンします！

2011年4月、史料館1階に、新しい展示室・閲覧室がオープンします。どちらも学内外問わず広く一般の方々に利用していただける施設です。これまでご来室いただきました常設展示室(2階)とともに、どうぞご利用下さい。

●展示室

新展示室には、常設展示室と、および種々のテーマで展示を行う企画展示室が新設され、それぞれ当館が所蔵する貴重な資料を展示する予定です。なかでも常設展示室では常設展「魯迅と東北大学—歴史のなかの留学生—」を公開する予定で、若き日の文豪・魯迅の仙台における留学生活、藤野巖九郎先生との心の交友を、当館所蔵の貴重な資料とともにご紹介します。



新展示室(改装中)

●閲覧室

2011年4月の「公文書管理法」にあわせ、新展示室の隣に新しい閲覧室がオープンいたします。室内には専用の閲覧机や資料検索性のパソコンが常備され、「特定歴史公文書」となる本学の貴重な公文書や、その他の多様な大学史関係資料をここで調べ、閲覧することができます。

史料館ガイドブック「歴史のなかの東北大学」「魯迅と東北大学」

史料館常設展示の内容をまとめた2冊のガイドブックを、東北大生協各店舗で販売しています。本学の歴史や、文豪魯迅の仙台留学について、当館所蔵の資料や写真を通じて解説しています。

「歴史のなかの東北大学」(A5版32ページ:300円)

「魯迅と東北大学」(日本語版/中文版 A5版16ページ:260円)



資料の収集にご協力をお願いします

東北大学で活躍した教職員、東北大学で青春を過ごした学生たちの歴史を豊かに伝える「東北大学校友アーカイブズ」構築のため、史料館ではかつて本学にご在学・ご在職された方々、本学にゆかりのある方々に、お手許にある本学の歴史や学生生活に関わる資料のご提供をお願いしております。ご協力をいただける方は、当館までご連絡をお願いいたします。

収集資料の例 本学での学生生活に関わる資料(各種学生団体の記録や印刷物、学生服・制帽など)
 本学での教育研究活動に関わる資料(講義ノート、大学運営に関する各種の記録など)
 本学に関する映像資料(写真、ビデオテープ、その他)

東北大学史料館だより 第14号 2011年3月1日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217) 5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>